

---

# **英雄物語～月と太陽のレクイエム～**

林田くう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄物語～月と太陽のレクイエム～

### 【NZコード】

NZ799Y

### 【作者名】

林田くう

### 【あらすじ】

主人公、一は日陰の世界の住人・・・世間で言つ不登校児であった。

ひょんなことから異世界・・・「太陽の世界」にやつてきた一は王国の姫、ユナからあるお願ひを受けるのだった。「世界中には勇者」を倒して欲しいのです

残酷な「勇者」の存在。そして、2つの世界の隠された秘密・・・人々の想い、願い、そして別れ・・・。ひ弱だった少年が最後に手にするものとは・・・

不登校児であつた少年の成長と冒険、そして恋を描く本格的ファンタジー開幕！

「捧げるよ。この命全部、あんたのために・・・」 - 本文より

\* 題名「僕等が紡ぐ恋の詩」より、変更しました。

## 登場人物

主人公 不登校児だった少年  
名前：一  
年齢：15歳

「太陽の世界」

ヒロイン 一国の姫君  
名前：ユナ  
年齢：15歳

仲間 ユナの従者  
名前：ルカウティウス  
年齢：27歳

仲間 ルカウティウスの妹  
名前：シェル  
年齢：12歳

仲間 超のつくほどの美男  
名前：クラウド  
年齢：20歳

謎の美少女 クラウドが仕えている

名前：ティア

年齢：18歳

「月の世界」

魔王 「月の世界」の支配者  
名前：デザイヤ  
年齢：589歳

魔族 魔王の従者  
名前：ドゥーデント  
年齢：387歳



## 登場人物（後書き）

また、増えるかもです。

## 序章

闇ぞれた世界の中で終わりを迎えるのだと思つていた。

外に出るのが怖くて、誰かにけなされるのが怖くて・・・。

それが怖くて、僕は逃げた。

友達から、学校から、世の中から。

夜な夜な母さんが泣いているのも知つてゐし、父さんが僕を嫌つて  
いるのも知つてゐる。

大丈夫、僕がいなくたつて世界は何も変わらない。

それに弟の大樹がいるじゃないか。

僕は、日陰の住人・・・

世間は、僕のことをこう呼ぶ。

「不登校児」

これは、そんな少年に起きた奇跡の出会いの物語である・・・

## 少年は夢で出会つ

「ねえ、一学校行かないの？」

「行かないよ」

「そ、そうよね。」めんなさー・・・」

「おー、一いつまでそうするつもりなんだ。」

返事が返つてこない。父はふう・・・とため息をついて母の肩に手を置いて我が息子の部屋から遠ざかっていく。

それが分かると、一はのろのろとベットから出て閉め切ったカーテンからちよつとだけ外を覗いてみた。

一は今年で15歳になつて、立派な大人への道を歩みだす年齢。

それはあくまでも・・・一般の場合だが。

最後に外に出たのはいつだつただろうか。たしか・・・中学の入学式の日。

中学なら、知らない人だつているし平氣だと言われて行つてみたのだ。

結果は・・・凄まじいものだつた。

小学の時に一緒だつた一部の生徒がクラス中に一のことを見つめ、よ

つてたかってからかってきたのだ。

当然、一は怯えに怯え、それが最後の外の世界になり……

「……」

一は、そっとカーテンを閉め、服を着替えてみるが別に切る必要などない。

外に出たい……出たくない……

矛盾する口の気持ちに一は髪をかきむしり、ベットに倒れ毛布をかぶる。

「はあ……」

ため息をついて、眠りに着く。

(もひ、目なんて覚めなければいいのに……)

「助けて……」

真っ白な世界。どこまでも、永遠にあるような空間に一は立つてい

た。

「誰？・・・誰なんだ？！」

どこのからか聞こえる謎の声に一瞬翻弄される。

少女の声のようだった。それも、凜として優しく溶けやぶつな声・

「わたくしは、ユナ・・・」

「ユナ・・・？」

「助けて下さい。一様・・・」

「ちゅうど、待てよ！…僕は・・・…」

外に出られない・・・と、言つといひで止まった。

これは・・・夢だ。夢なら怖くないかもしれない。現に今、少女と普通に話している。

ならば、せめて夢の中で外に出るのもいいだろう。

「分かった。助ける」

「あつがとつ・・・」

ほんの少し、声のトーンが上がった気がした。

そして、ぼやけていく視界・・・

「……」

突然目が覚めて、身体を起こす。

あたりは一面草木花・・・人工的に作られたであろう物が一つも見あたらない。

風が心地よく通り過ぎ、草同士がざわざわと風を喜んで迎えている声に、青い空に流れる白い雲

「本物みたいだ・・・」

こんなにも空気がおいしいとは知らず、こんなにも草の擦れあう音と海の満ち引きの音が似ていることも知らなかつた一は胸を躍らせて、思ひが忽に両手を広げた。

「あいつか。」

「！？」

驚いて振り向くと、そこには赤い髪の青年が立っていた。

「だ、誰なんですか・・・。」

「ユナ様がお待ちだ。着いて来い

青年は、自分のことだけを言い背中を向けて歩き出す。

着いて行くか・・・行くまいか。

考えるのに、少々の時間を使い・・・着いていくことにした。

ユナといつ少女との約束があるじやないか。

それが、決め手だった。

少年は夢で出来た（後書き）

新しく始めた連載作品です。  
応援よろしくお願いします^ ^

## 月と太陽の狭間

「あの……」

「の前をツカツカと歩く青年に勇氣をだして声をかけているのだが、青年は一向にこちらを見ようとしない。

だんだん腹が立つてきて、ついにはひときわ大きな声で呼んでみた。

「あの……」

すると、やっとのことで青年は反応を示す。

「何だ」

「あの……、ユナ様って誰なんですか？」

「ユナ様を知らない？『月と太陽の狭間』にて会ったのではないのか？」

「『月と太陽の狭間』……あの、白い世界のことですか？」

一の心臓が速くなつてきた。なぜなら、違和感を感じ始めたからだ。

この風とい地を踏む感触とい、夢にしてはできすぎている。

まさか……本当に違つ世界に来てしまつたのだろうか。

「本当に知らないようだな。ならばいい。あとでユナ様の口から聞

くことだらう。「ひる

青年は、ぶつきいじまうじていつと突然歩みを止める。

「あの町が、ユナ様の父上……ドゥルーガ王が治める王国の中心の町、サイケデリカだ」

城壁で囲まれた町は、高くそびえ立つ城を中心として成り立ついて、まるでヨーロッパやイギリスまたは、ゲームに出てきそうな町であった。

「すうい・・・」

違和感を忘れ、呆然としている一をよそに、青年はまた歩き始める。

「ちよ、ちよっと待つてくださいよ……」

一は青年の背中を追いかけながら、サイケデリカへと足を踏み入れた。

町はわいわいと市場に負けない活気で溢れていた。

遊びまわる子供たちに、ベンチに座って会話を楽しむ老人、買い物

物をする奥方、着飾つた娘達・・・

ありとあらゆるものが、一の好奇心をくすぐつてやまない。

「ルカウティウス隊長！！」

城に入る門のところで、青年は門兵に呼び止められる。

青年は、名をルカウティウスといひらしい。

「なんだ、騒々しい」

「申し訳ござりません……いや、実はですね・・・」

ここから先は、一に聞かせたくなかったのか、門兵が小声でしゃべったので一には何も聞こえなかった。

「分かつた、ただちに準備をさせておけ」

「ですが・・・」

「ユナ様にも、考えがあるのだ」

「・・・了解しました」

門兵はそう言って、ルカウティウスに敬礼をする。

そんなことはお構い無しに城に入るルカウティウスに、一は申し訳ない気持ちになってしまつ。

(僕は、あんな態度できつこない……)

急に、ルカウティウスが偉い人に見えて、なぜか一の気持ちはしぶんだ。

「お待ちしておりました」

玉座の間に連れてこられた一は、困惑しつつも頭を下げた。ルカウティウスで見えなかつたかもしぬないが。

「ユナ様、例の者を連れてまいりました」

「ありがとうございます、ルカウティウス。」

ルカウティウスは「もつたいなきお言葉」と言い後ろへ下がり、ユナといふ少女の姿がはっきりと見えるようになつた。

ユナは健康的な白い肌にくるんと巻き上がるまつ毛。将来は美女と称えられそうな容姿をもつてゐる愛らしい少女であった。

## 月と太陽の狭間（後書き）

ユナちゃんの年齢は近づいて書くと思いますが、一応書いておきます

「15歳」です！

一君と同じです。

## 太陽の世界

「えと、初めまして。」です

「一様・・・よひ」。我が王国、いえ、太陽の世界へ」

一様と呼ばれ、一は「そんなこと・・・」と、小さく言つたが、やはり恥ずかしかつたようで、手を後頭部に回して口にやかになつた。

「そこで早速、お願いの内容を話したいのですが・・・その前にこの世界について話さなければなりませんね」

ユナは、ほんの少し疲れたような表情になり話を始めた。

「わたくしたちの住む世界・・・ここを『太陽の世界』といい、もうひとつは・・・魔王が支配する世界を『月の世界』といいます。その名の通り、『太陽の世界』には月が『月の世界』には太陽がありません。ですから、夜は青い太陽が昇ります。」

「えー？」

「無理もありませんね・・・。あなたは『月と太陽の狭間』の世界から来たんですねの・・・」

「いや、だつて月と太陽つてゆうのは同じ宇宙にあって・・・」

「普通に見ればそうですが・・・太陽・月の近くに歪みがあるのです。」

「つまり……『月の世界』はわれ等の世界と魔王の世界にはさまれているのだ」

少し離れたところでルカウティウスがそう説明した。

「だから、月と太陽のどちらも世界に存在するんです」

「はあ……」

「まあ、そんなに固くならないでください。それで、お願ひといふのは……世界に散らばった『勇者』を倒して欲しいのです」

「ええ！？」

月と太陽の次は勇者ときた。そもそも、勇者については……ヒーローであって、正義の味方をさすのだが……。

「わたくしたちは『月の世界』の魔王と平和条約を結ぶことになつたのですが……民は、それを断固として拒否したのです。おかげで魔王の部下達も不信感を募らし、ついには自ら『勇者』と名乗り、魔王を討ちとらんとする者が現れたんです」

「それで、僕に『勇者』を倒せつて？」

「お願いできますでしょうか？」

つまり……これは夢ではない？

一は、試しに頬をつねつてみた。……心のどこかで痛くなればいこない。と、思つていたが……

「痛い・・・」

夢ではなかつた。

「嘘だらう・・・まさか、現実？そんな、まさか・・・」

ひやりと一の背筋が冷たくなつた。不登校児である少年が「勇者」を倒すRPGなんて、見たこともないし、聞いたこともない。ましてや、これが現実だとしたら、色んな意味ですこすぎる。現実であれば、ここに平然と立つてゐるなんてとてもできやしないのに。

「でも、僕は・・・つ、強くないです。弱氣だし・・・もつと、他の人に頼んだほうが・・・」

「太陽はあなたを選びました。ならば、わたくしはあなたを信じます」

「・・・。」

外に出たかった。ずっとずっと・・・

これが、夢ならなんだか都合が良い氣がした。全然人前でも平氣でいられるし、なにより、外へ出られる。

「分かりました・・・僕なんかでよければ・・・」

「ありがとう！？」

ユナはそこではじめて笑つた。つられて、一も笑う。

ただ、ルカウティウスの一を見つめる瞳は冷たいものだつた・・・

太陽の世界（後書き）

勇者が悪者つて、なんかスゲー・・・

目の前には、美味しいそうな料理が並ぶ。

トマトのスープにサラダ、そしてチキン・・・

時計は毎の1~2時をとうに過ぎ、朝から何も食べていなかった一の空腹感は最高潮だった。

全ての料理において、空腹は最高の調味料なんてやうが、それはこもつともである。

「 いただきます！ ！」

最初の一 口。

料理は、鮭をガーリック風に味付けしたもので、口に入れるとこんなくの風味が口いっぱいに広がり、鮭のうまみを引き立てる。

「 ん～・・・おいし

広いテーブルの向こう側には、ユナが座つてじっと一を見つめていた。

「 ・・・あの、何か僕に用ですか・・・？」

「あ、その、たいしたことではなくて・・・ええ、えと・・・一様は、お幾つでいらっしゃいますか？」

「15・・・ですか？」

「あ！・・・ああ～。わたくしと同じ年齢なのですね」

・ 同い年？

両者、動きが停止した。

すつかり、ユナが年上で一が年下だとばかり思っていたのである。

「あ・・・はは」

なんだか、恥ずかしくなった一は手を動かし、料理を食べることに  
よつて紛らわした。

(なんだろう・・・)の違ひは・・・

誰がどうみても、ユナのほうが大人びているとこたえるであろう。

まあ、一国の姫君と不登校鬼を比べる時点で可笑しいのだが。

「うれしかったです」

なんだかんだいって食べ終わってしまい、手を合わせた。

「お口に飲んでましたでしょうか」

「はい。とっても美味しかったです」

「そうですか、それはよかつた」

これを不味いといつほじ、自分は舌が肥えているようにみえたのだろうか・・・?

世間知氣味の一はなんとなくやつ思つた。

「今日はしつかり休んで、明日には出発するつもりですが、よろしいですか?」

「あ、はい」

「では、お部屋に案内しますね」

「ひとつ笑つて、コナは席から立ち上がった。

「はあ・・・」

案内された部屋に入り、早速ベッドに倒れこむ。

なんだか、とんでもないことになってしまった気がしていた。

〔太陽の世界〕 〔月と太陽の狭間〕 〔月の世界〕 〔勇者〕 ・・・

ゲームではないし、夢でもない。

勢いで答えたものの、自分になんかできるのだろうか・・・  
色々考えていたが、だんだん不安になってしまった一は、毛布に包まつ  
て丸くなつた。

学校や、クラスメイトのことを覚えてると怖くなつてくれるのだが、い  
つもこゝまで眠りに着く。

『悲しかつたら、眠るんだよ。お母様が照つているなかでね・・・  
?』

そう言つていた、祖母を想い出し一は眠りに着いた・・・。

同じ年（後書き）

お腹一杯なのに、書いてたら何か食べたくなつてきた・・・

## これ、【勇者】を倒す旅へ

「うわ・・・」

Tシャツにジーンズといった服装だった一は、旅に出るに当たって服を着替えることにした。

とこりか、強制されたのだが。

服を着替え、いかにもRPGの主人公のようになり始めた自分に戸惑いつつ、一はほんの少し浮かれていた。

そして、剣を腰に差して部屋を出た。

「ああ、一様ーーー！」

城門付近で立っていたユナが一に気づき、駆け寄ってきた。

「あれ？ ユナさんも来るんですか？」

今日のユナの服装は、昨日のドレスとは違い動きやすそうなものだつたので、一はやつ尋ねた。

「もちろんですか」

一国の姫様が自分の旅についてくる・・・

なんというフレッシュシャーだらうか。一は内心、やめてくれえ――。  
と、頭を抱えていた。

もし、これでユナを死なせてしまつたら・・・考えるだけで恐ろし  
すぎだ。

「俺も行くぞ」

「ルカウティウスさん・・・」

「ルカウティウス・・・」

別に昨日と何も変わらないルカウティウスがやつて来て、一の前に  
仁王立つ。

威厳に溢れた青年は、一を見下ろし低い声で言つた。

「覚悟はあるのか」

「・・・は、はつかり言つと、こまこちこの状況についていけてな  
くで・・・」

「あるのか、ないのか」

一択で答えるところへりしこ。

一は、ほんの少し悩んでからさつきつと言つた。

「ないです」

「……ないのに、行くのか」

「僕は……きっと何もできないだらうし、それに力があるとは思えない……きっと、死ぬということも、よく分かっていないと思います……ルカウティウスさんと比べると。」

ルカウティウスは少しの沈黙ののち、

「行くぞ」

と、だけ言った。

良いところとなのだろうか……？

一は、よく分からないまま、「はい。」と黙って歩き出す。

こんなパーティー……いや、こんなメンバーができるのだろうか。

「まず、向かうとすればフーカ村がしら」

地図を見ながら、3人は歩いてゆく。

「フーカ村……」よつもう少し東ですね

「（勇者）から（勇者）が出るなんて珍しいのだけど……」

「（勇者）が出たかなんて、分かるんですか……？」

ルカウティウスとコナの会話に割りに入るのも、なんだかと思つたが、どうしても気になつたので勇氣を出して聞いてみた。

「ああ、やうね。それは言つてなかつたですね。ルカウティウス、説明をしてあげて下さい」

「（勇者）は魔王討伐のため、各地にやつてくる魔を……（月の世界）の者を攻撃する。そこで、俺たちに報告してくるといつわけだ」

「なるほど……」

「その時は、悪魔達が（勇者）を攻撃しても罪にはならない」ということになつてゐるのだけれど」

そう付け足して、説明は終了した。簡単に説明してくれたので、一はすぐに覚えることができたのである。

「まあ、フーカ村はのどかな良い村ですから」

コナはそう言つて、一を安心させようと思つたのかも知れないが当の本人はほんの少し、旅行気分でいた。

これ、{勇者}を倒す旅へ(後書き)

やつと、冒険が始まりました。

ああー・・・「ルカウティウス」が打つのめんぢへせーーー・・・

## フーカ村

ざあ・・・

風で木の葉と葉がこすれ合い、音を奏である。

フーカ村・・・風車がいくつも並び、壮大な草原に畠つように牧畜を主とする者達が住む村。

(田舎つて感じだな)

村というくらいなのだから、それなりには心の準備をしていたが少し、ショックを受けた。

サイケデリカが華やかなだったので、心のどこかで綺麗な建物を想像していたのかもしねりない。

「一様、どうかしましたか?」

「あ、いえ。なんか、ほのぼのしてるなあー。と思つて」

あはは・・・と、笑い誤魔化し、フーカ村へ足を踏み入れた。

「ンモオー・・・

「メヒー、メヒー」

村に入ると、牛や羊達の鳴き声で溢れていた。

牛舎のような建物が建ち並び、買い物に来た奥方がそれぞれのお店をチョックする。

一体どうしたんだろうか……気になつた一は足を止め、じつとその光景を眺めてみると、一人の奥方が店に近づいた。

「2リル、頂戴」

「はいはい、毎度！」

店の者は、いそいそと牛に近寄り乳を搾つた。

（そつか・・・頼まれてから乳を搾れば新鮮な牛乳が飲めるな・・・）

一は謎が解けたのに満足したのか足を動かした時

「一様の世界はこうして牛乳を得るのではないのですか？」

ユナがたずねてきた。

「うん。なんていうか・・・搾つてからだいぶ経つてるかな

「そうですか。なら、宿でこの村の美味しい牛乳をいただきましょ  
うか」

にっこり笑つて、また歩き出すユナに一は見失わないように走つて駆け寄つた。

見失うほど、人なんていないのだが。

「あらまあ、ユナ様」

ユナが訪れたのは宿というよりも、普通の民家だった。

「こんなにちは。ラミアさん」

2人は、どうやら顔見知りらしく仲がよさげだった。

「あなたが来たってことは……あの子がかい？」

ラミアと言つ30代くらいの女性の視線が一に移る。

「は、一です。初めまして！」

これが現実だと分かつた今は、新しい人に会つと少しどもどきしたが、不思議と恐怖感はなかつた。

「うつふふふ。ずいぶんとお行儀のいい坊やだね。まあ、中に入りなよ」

「お邪魔します・・・」

3人は、ラミアの家に入れさせてもらうと、その瞬間ぶわつ……と、甘い香りが一の鼻孔を刺激した。

「あっはははは……」めんね、驚いたかい？」

「び、びっくりしました……」

「うちの家はね、代々香水を作ってるんだよ。他の町に牛乳を売りに行く時とかね、臭いと近寄ってくれないから」

「売りに行くって……牛を連れて行くんですか？」

「そうだよ。新鮮が一番だからね……」

「ラミアはそう言って一たちに席を案内した。

席といつても、いつも食事を取るようなテーブルのところのイスだが。

「一? だつだけ? ホットミルク飲む?」

「の、飲みたいです……」

「よし、じゃあ作るからちょっと待ってな」

ラミアは台所に立ち、大きなビンに入れてある牛乳をなべに飲む分だけ注ぐ。

「あ……ユナ様とルカもいるかい??」

「じゃあ、お願ひします」

「頼む」

「おつけー」

2人分、追加して暖炉の上に置き温める。

「それで、『勇者』討伐はどうなってるんだい?」

「だいぶ減つてはいますが、熟練の『勇者』となると手に負えない状況です。魔王には到底かないませんが・・・」

「はあ。困ったわねえ・・・いくら人間といえど限界はあるとゆーのに」

ウニニアはため息をついて、遠い目をした。

フーカ村（後書き）

そろそろ寒くなつてきましたね。  
ホットミルクが恋しい季節がくるう！！

ミルです。

「はい。でもたよ

コップへ移したホットミルクを3人それぞれの前に置いた。

「いただきま

湯気が立ち、コップを持つと少々熱かったのでフーフーと、息を吹いて少し冷ましてからやけにしなによつて恐る恐る飲んでみた。

「おこし……」

牛乳独特の臭みがなく、味がしつかりしている。

「それはありがとう。」

「ハリマは嬉しくて微笑んで、窓の向こうを見つめた。

「遅いわね……まだ帰つてこないわ

「どうかしたのか?」

「いや、たいしたことはないんだナビ……ミルが帰つてこないのよ

「行ってくれるのか? ありがとう

「ああ、それじゃあ僕ちょっと見ておきます

「は、席を立ち家を出た。

ミルところのは、ラニアの娘さんのことだらう。」は、ラニアが見ていた窓のある方向に歩いていった。

「あ・・・

草原かと思った家の裏は、花畠。

そこに少女が一人、花を摘んでいる。

茶色い髪を左右二つにくぐり、もくもくと作業に取り掛かっているようだった。

「は、ゆっくりと少女に近寄った。

「あの・・・

「わわわー!?

少女は悲鳴をあげ、振り返った。茶色い髪に、茶色の瞳。

「あ、えっと、ミルさんですよね?」

「はー・・・

「僕、一ついいます。あの、ラニアさんが遅いって、心配してい  
たので呼びに来ました」

「…………君？あの、ありがとう。作業していると時間が経つのを忘れちゃって……でね、あの。図々しいかも知れないけど、この花を入れたカゴを加工場まで持つていってくれないかな？」

「いいですよ」

「ありがとうございます。じゃあ、今ちちは私が持つから、一君はそっちを持つて」

「うん。」

カゴを持って、2人は加工場まで歩いた。

加工場は、家のすぐ近くだ。

「一君、『勇者』討伐に来たんでしょ？」

「そうだけど……なんで分かったの？」

「なんとなく……かな？」

ミルはリリアに似て明るい子で、その笑顔はまるで花のようだった。

「うん、これでおつけ。ありがとうございます、一君」

「ううん、たいした」としてないし……」

「それでも、助かつたから。ありがとう!」

「ど、どういたしまして……」

なんだか、目の前の子が眩しくて一は恥ずかしくなった。

(ああ、田向の子だな)

自分とは反対の人……

「よし、じゃあ戻りつか

「おかえり、また作業に夢中になつてたんだろ?」

「うめんなさい」

ミルは、てへ。と笑い、イスに座つた。

「改めて紹介しておくわね。ううの娘、ミルだよ」

「ミルです。」

「仲良くなかったりね

」「は、我が娘の背中をばんーと呂いた。

「いたつーーおゆわん、強めーーー。」

「うるさいーーー。」

その場は、終始笑いが溢れた。

ミルです。（後書き）

今日は、ミルちゃんが登場しただけ。  
わづ、ぐだぐだです。

## 当たり前の幸せ

すっかり辺りは暗く静まつ返り、ほのかに肌寒い。

そのせいか、夜空に輝く星がとても綺麗に見えた。

一は草原に寝転がり、腕を枕にして空を見上げていた。こんな綺麗な星空を見るのは初めてだった。

「ここさな所で寝そべっていては風邪を引きますよ」

「あ・・・コナさん」

コナは一の横で三角座りをして、空を見上げた。

「この世界は・・・・・でもじょんな風に墨が綺麗に見えるんですか?」

「え? ああ・・・そうですが、一様の世界は違ひのですか?」

「あんまり星は見えないんですけど、久しぶりなんですね。星空を・・・べれに見えるかもしれませんが」

「そうですか・・・・・。わざいえば、久しぶりなんですね。星空を・・・眺めるの」

「ここさなに綺麗なの?」

「だからでしょ? ね・・・とでも綺麗。それが当たり前で・・・」

当たり前つて、すゞく幸せな事だ。

なんて、よく言われるが、本当にそう思つたのは「」の時がはじめて  
だった。

フーカ村に来るまでだつて、車とか自転車つて便利だつたな。と、  
何度も思つた。

2人はそれからただ、星空を眺めていた・・・

「ハリアさんの息子さんが・・・」

「『』めんなさいね、あんなバカ息子で」

次の日、一は「」に来た理由を聞くこととなつた。それも・・・ラ  
ミアの息子が「勇者」になつたといつものだった。

「ある日突然ね、思い立つたように『母さんー！オレ、『勇者』に  
なるー！』って言つて、家飛び出して・・・それきり、帰つてこな  
いのよ」

「それは、何日ぐらい前の話なんだ？」

「3ヶ月ぐらい前かしら・・・」

「分かりました。とりあえず、どんな服装だったのか。それと、名前を一応……」

「服装は、普通の普段着に赤いマントを羽織っているだけよ。名前は……マルク」

「……じゃあ、行きましょう。」

「あ、はい」

当然のように立ち上がった2人に、一は急いで立ち上がると、ハリアが「ねえ」と声をかけた。

「……気をつけるんだよ」

「?.はい・・・」

ハリアの一を見つめる田があまりにも悲しそうで、一は少しうつむかえてしまった。

(どうしたんださつ・・・)

一は、疑問に思いつつ2人に続いて家を出た。

「うわ・・・」

やつてきたのは森の中についた、いかにも悪魔や魔物の住処といった不気味な感じの洞窟だった。

「この中にマルクさんいるんですか？」

「多分な・・・」

「？？」

やはり、そうだ。さつきから2人の様子がおかしいのだ。まるで、死者をともじつかのよつな・・・。

「何をしていろ、行くぞ」

「あ、すみません！――」

ぼお・・・つとしていた一をよそに歩き始めていた2人を追いかけ  
るようになは暗闇の洞窟の中へ入つていつた・・・

## 当たり前の幸せ（後書き）

なんだか、怪しくなってきた・・・

「真っ暗ですね・・・」

洞窟の中は、壁に簡単なたいまつがついてある洞窟内は、どんよりとした暗闇で包まれ、長時間ここにいるとなれば、かなりの体力を消耗しそうだ。

「静かね・・・誰もいないのかしら・・・」

「それは違うでしょ、う」

ルカウティウスが足元を見やる。

「わああ！！」

そこにあつたのは、白骨化した人の死体だった。

「・・・」

ユナは、しばしその死体を見てから「違う」と首を振った。これは、マルクではないと。

そんな落ち着いている2人をよそに一は、初めて見る死体に怯えていた。

「一様は・・・見るのは初めてですか」

「あ、・・・はい」

あえて「何を」かと聞かなかつたコナの優しさに感謝し、一は弱々しくうなづくと、コナも弱々しい微笑を浮かべた。

「わたくしも初めて見たときは、ショックで夜、疲れませんでした。  
・・

どうが、マルクさんが生きているようにと願いながら、3人は進んでいった。

「……が、洞窟の最深部・・・」

大きな場所に出るとそこの中間に誰かが立っていた。

「あれは・・・」

ルカウティウスが目を細めてその中心に立つ者を凝視した。

「おやおや・・・これはコナ様ではありませんか」

尖った耳に妖しく煌めく青の瞳。人間ではない何かが違う男がうやうやしく頭を下げた。

「まあ、ドゥーテント様。こんなところで会つとは奇遇ですね」

「いえ、ちよつとこの洞窟には何もあつませんが」

「探索？」の洞窟には何もあつませんが

「以前、ここにいた者の遺体を回収しに来たのですが……どうやら、骨の髏までやられてしまったようですね」

「申し訳ありません。わたくしの力不足で……」

「それはこちらもです。なかなか契約に踏み出すことができず……おや、そこの少年は……」

突然、話が自分に吹き込んできたので一はたじろいだ。

「えと。一です。初めまして」

「初めまして。殿下……魔王様の召使いのドゥーテントです。以後、お見知りおきを」

「魔、王……えー？」

魔王……といえば、角とかが生えていたりコウモリみたいな羽がついていて、もつとうう……人間離れした容姿を想像していた一は少なからず、ショックを受けた。その様子に気づいたドゥーテントは、やわらかく微笑んで説明した。

「魔族は人間に変身することができるのですが……強ければ強いほど、人間の姿をしたときに美しくなるんですよ」

つまりは、強ければ美しく弱ければ醜いということだ。

「おや、とんだ時間を食つてしましました・・・殿下がお怒りになる前に失礼させていただきます」

刹那、ドゥーデントを囲むように風が吹き、気づいたころにはドゥーデントの姿はなく、風が吹いた後の余韻が残っていた。

「い・・・今のは、魔法・・・？」

「一様は、見るのは初めてですか?」

「はい・・・あの、魔法つて使えるんですか?」

「はい、わたくしたち人間は使えませんが魔族は使うことができま  
す」

人間は使えないのか・・・ちょっと期待していたが、見事にはずれ  
一はしょんぼりとした。

RPGといえば、魔法。それで魔物を倒していくのが一般だが、人  
間には使えないらしい。

「あれは・・・?」

突然、そう言って歩き出したルカウティウスに続いて、なんだなん  
だと壁際に寄つてみる。

「これは・・・!」

**魔族（後書き）**

強ければ強いほど美形になるなり、やつぱり魔王さんは・・・！

〔勇者〕

すでに白骨化が進んだ死体が力尽きたように壁際に座っていた。何故、3人がこの死体を驚いてみたのかといわれれば、それは、その死体が以前は綺麗な赤であつたであろう、今は泥をかぶりところどころ穴の空いた赤いマントを羽織つていたからである。

3人は口に出さずともこの死体がマルクであったことが分かつていた。

ユナはその死体に近寄り静かに祈りを捧げ、そつとマントを取り、じっとそのマントをしばし見つめ・・・うつむいた。

「ユナさん・・・」

すでに手遅れだつたのが悔しくて泣いているのか。それとも、何故〔勇者〕になつたのかと、母や妹を心配させてまで、これがしたかつたことなのかとマルクに説いているのかは分からない。それでも、一はあつたこともないマルクになぜか同情をしてしまつた。

(マルクさんは・・・これでよかつたのかな・・・〔勇者〕なんかにならなければ、家族とずっと幸せに暮らさせていたかも知れないのに・・・)

「・・・帰りましょ。ラニアさんのところへ

「・・・はい」「ああ・・・」

3人は無言で来た道を戻つていった。広い場所を出る時、一は一度

だけ振り返った。でも、そこには誰もいない。ただ、薄ら光るひつそくの火に、無数に転がる骸だった。

それを最後に、一は振り返ることはなかつた。

「ユナ様！？」

ノックをすると、勢いよく扉が開き中からラミアが飛びってきた。

「あの・・・」

ユナは、そ・・・と、赤い布を差し出した。ラミアは、一瞬何かわからなかつた様子だつたが、すぐにそれが何なのか、何を指しているのかを悟つたらしく、小刻みに震える手で、それを受け取つた。

「バカ・・・息子・・・」

ぎゅっと汚れきつたボロボロの布を握り締め、その場にしゃがみこみ声を殺して泣きはじめた。

「・・・」

ユナはひどく悲しげな顔をして、ラミアを見下げていた。一国の姫として、民が亡くなるのはやはり悲しいことなのだろうか。一は、

ただ、マルクの死ぬ寸前の気持ちが気になっていた。

「『めんなさいね・・・突然泣いちゃつたりしちゃつて』

席に座り、リニアは落ち着いてぽつつ、ぽつつと話し始めた。

「夫も・・・『勇者』になつて『くしてね・・・もう、こんな  
思いしたくなかったのに・・・』

「そんな・・・」

夫の次に息子を同じ理由で亡くすなんて、どれだけの苦痛だろうか。  
もう、こんな思いしたくないと思い、そして、また出来事は繰り替  
えす・・・。

「一は・・・『太陽と月の狭間』から来たんだってね・・・そこでは、『勇者』は世間からどう見られているの?」

一は、一瞬戸惑つた。ありのままを伝えても良いのか。やつ思つた  
のだ。

「・・・英雄と似たような、感じです。」

「・・・そう。」

ため息交じりのラミアの返事は、何故か、一の胸にぐさつと棘が刺さつた。

「〔勇者〕って、なんなんだ……

辺りもすっかりと暗くなり、近くの林からはフクロウらしき動物の鳴き声がした、そんな頃。ラミアの家の近くに生える一本の木の枝に1人の男が座っていた。

男は眉目秀麗で鼻も整つており、非常にすつきりした綺麗な顔立ちをしていた。

(あれが・・・ユナ)

窓から見える一人の少女。じつとしているだけで品が漂うのだから他の少女達の中にまぎれていても、すぐに見つけられそうだ。

(それにしても・・・似ているな。いや、同然か)

男は、頭の中で彼女を思い浮かべた。元気がよく、はきはきしているのに凛として気品が漂い、月下美人の花のような・・・

「やーて。お仕事とりますか。」

愛し、ずっと見守ってきた彼女のため、男は立ち上がった。

〔勇者〕（後書き）

皆さん、月下美人という花をご存知ですか？綺麗ですよ、月下美人。

初めて聞いた人は、「それ誰？」って、なつたかもしませんが、人の名前ではなく、花の名前です。ぜひ、見てみてください

## 新たなる町へ

「この世界の象徴である太陽が昇り始めた頃、ふと、一は日が覚めた。身体を起こし窓の向こうの景色を見ると、ちょうど太陽が昇つてきていて空がほのかにピンク色だった。

一は身なりを整えてから外に出て深呼吸をし、空に昇る太陽をぼつ・・・と眺めた。

昨日がなんだか夢のようで。いつそ、あのが夢だったら良いのにと思つた。それが、なぜかは一自身にも分からなかつた。ただ、そう思つたのだ。

「もう行くんだね」

朝「はんを食べてから、3人はフーカ村を出ることにした。

「色々と、お世話になりました」

タダで寝泊りさせられ、これから旅路のためにいくつか食料も持たせてくれ、ラミアには、すっかりお世話になつていた。

「ユナ様、行くの？」

ラニアの後ろからひつそりとミルが顔を覗かせた。昨日、マルクの死を告げてからずっと部屋に引きこもっていたのだが、ユナたちが出ると知り、起きてきたのである。

大体の想像はできていたが、やはり、ミルの腫れた両目を見ると、ユナはどうしても申し訳ない気持ちになってしまった。もう、どうしようもないというのに。

「・・・ええ」

「お元氣で・・・」

「ミルさんも・・」

こうして、3人はフーカ村を後にしたのであった。

フーカ村がだんだんと遠くなっていくが、前方はいまだ草原が続き、道らしい道がなかった。

それどころか、人っ子一人もいない状態だった。普通、何人か通りかかるても良いような気もしないのだが。

「あの、ルカウティウスさん。今度は、どこに行くんですか？」

「この方角を進んでいくと、それなりの町がある。そこを田舎す」

「町の名前は、フルール」

フルール・・・と、1人口に出して繰り返した。今度はそれなりの町ではあるらしい。

「ただし・・・その町に行くには」

ユナの説明がピタリと止まり、その後に無数の足音がした。

「・・・の道、盗賊なんて出てましたか・・・」

3人は盗賊たちに囲まれていた。男たちは、いかにも悪そうな顔をして手にはナイフを持っている。

「お姫様、金品はここに置いてつてもらいましょうかい」

「金品? そんなもの、あなた達には似合わないでしょ?」

「寄こすきはないってかい・・・それじゃあ、強制的にもらおうか!」

「!...」

1人の男の声で仲間達が一斉にナイフを振りかざし、3人に向かって走ってきた。

「ひい!...」

1人は尻餅をつき、そろそろと後ずさった。剣の心得がなく、初めて

こんな場面に遭遇した一は恐怖に耐えられなかつたのだ。だが、そんな一において少女であるユナは、剣を持つていた。

「はああああーー！」

一閃。ユナが剣を大きく振りかぶり、男を斬つた。

「ぐふ・・・・！ー！」

男は、崩れるよつにその場に倒れた。斬られた部分から流れるまだ、温かい血。

「う・・・・あ・・・・」

初めて見る命のやり取りの場面に一はすっかり怯えきつて、体中が震えていた。

次々と盗賊たちが倒れていき、そのたびに血が流れる。そして、その中には2人の血もあつた。綺麗だつたユナの頬に一筋の赤い線。ルカウティウスの一の腕の部分から流れる血。

それでも、盗賊の数は減らない。むしろ、押され始めているようこそも見えた。

(助けなきや・・・・！)

それでも、体中が振るえ立つことをえままならなかつた。

「ぐふ・・・・！ー！」

一の心の中で焦りが生まれ始めた。このままじや、殺されると……

「助けてあげようか」

耳元で囁く低い声。

一が驚いて振り返ると、そこには見たこともない美男子がいた。

「誰なんで」

一が言い終わる前に、男は戦いの中へ身を投じた……

新たなる町へ（後書き）

ファンタジーには（ラノベ全般ですが）美形がかかせませませんよね！！

## 双剣使いの美男

「くそ・・・・！」

ルカウティウスは、苦戦を強いられていた。自分の仕事は、ユナの護衛だが、今の今の状態から戦えるとは思わない。ルカウティウスは、2人をかばいながら戦わなければならなかつたのだ。そうなると、いくらルカウティウスほどの強者でもこの数の盗賊を倒すには少々無理があつた。

(こうなれば、一には・・・)

その刹那、ユナの身に刃が振りかざされる。

「ユナア――――――！」

一の叫ぶ声でルカウティウスは、それに気づいたが今からでは間に合わない距離だった。

「ユナ様・・・・！」

刃が、太陽の光を反射して光る。

そして――

ガキイインン・・・

刃と刃がぶつかる音が響いた。

盗賊の持っていたナイフに、2つの剣

「あーーー。女に手を出すなんて・・・だからモテないんじゃないの？」

胸に心地よく響く低い声。

双剣を手に持ち、余裕の笑みを浮かべる。

「なんだとてめえーーー。」

「はいはー。そつ怒らない怒らない」

「ーーーんにゃら・・・なめやがつて・・・ーーー。」

盗賊は間合いを取り再度攻撃に出るが、相手の男はちつとも動かない。むしろ、微笑んでいる。

「どらあああああ」

ナイフを振り上げる。

皆が2人のやり取りに固唾を飲んだ。

ぐしゃ・・・

身体を貫く一本の剣。

勝つたのは、双剣使いの男だった。

「・・・で」

剣を抜き、空を切る。

「次は誰？」

何もなかつたような爽やかな表情に、盗賊たちは後ずさつた。理由は、それだけではない。倒された盗賊は、綺麗にミリのずれもなく、心臓を一刺しでやられていたのだ。

「に、にげるおー！」

盗賊たちは一斉にその場から逃げ出し、残つたのは3人と謎の男だけだった。

「あの・・・」

ユナは、恐る恐ると近づき声をかけた。

「何？」

「あ、の。助けていただいてありがと「ハジセコ」ました」

「あー。別に良いよ。」

振り返つて、そう答えると双剣を鞘に戻した。

男は眉田秀麗で鼻もすつきりしている。そんな爽やかな顔なのに、男の凛とした空気に一はほんの少し、憧れをおぼえた。

「貴様、何者だ」

男の首にルカウティウスは剣を当てる。

「ルカウティウス！！」

「答える」

制止するように言うユナを無視して、ルカウティウスは言葉を続けると、男はやれやれ。といつよつなしぐさをして、ルカウティウスの方に向き直った。

「初めまして。俺の名はクラウド。よろしく」

## 双剣使いの美男（後書き）

## 一触即発

「クラウドさん……」

一は恐怖から回復し、よろよろと立ち上がりクラウドを含む3人の元へ近寄った。

「あーー！少年！！大丈夫か？！」

「冗談交じりに言つてくれたつもりだつただろうが、一の胸にぐさりと棘が刺さつた。『太陽の世界』に来て心が浮きだつていたせいもあるだろうが、今さら、自分が無力だつたことに気づいた。

(僕は……何もできない……)

そんな一に気づいているのか、あるいはわざと気づかないフリをしているのか。クラウドは、ルカウティウスに話しかけた。

「俺が名乗つたんだから、そっちも名乗つたらどうなんだ？」

「それは、すまなかつたな。俺の名は、ルカウティウスだ」

「ユナです」

「ユナって、あれ？姫さん？」

気づくの遅いだろう……。ルカウティウスは内心ツッコミながら、ため息をついた。だが、この男……不思議な事に、何を考えているのかさっぱり分からなかつた。ルカウティウスは警戒を強める。

「 といひの前の前せりんな所で何をしていたんだ？」

クラウドは、「あー……」と呟きながら、頭をかいて

「武者修行」

と、答えた。

「 . . . 」

さすがのコナもこれには呆気にとられた。つい先ほどまで落ち込んでいた一をも「は？」と言いたげな顔をしている。

「あはははは……なんで、そんなポカーンって、しつらのわ……」

「貴様、ふざけるな」

「ふざけてなこつて……」

クラウドは、くつくつと笑つているガルカウティウスの顔は更に険しくなつてこぐ。口のまほじやヤバイーと、察した一は

「あの、クラウドさんは武者修行をしてるんですね」

「 セハ もはや たじやん」

「 じりして 武者修行なんでしたるんですか」

「 それはね、強くなるためでしょ」

「もう十分強いじゃないですか」

「これからは、ちょっと言えないいんだけどなー。」

「『勇者』になるためか

ルカウティウスの顔が、鬼のようにになっている。

一触即発の状態にありながら、クラウドの顔から余裕が消えること  
はない。それどころか、

「やつだって言つたらどうする?..

「...」

ルカウティウスは、目を細め剣を構える。

「この場で貴様を殺す」

## 一触即発（後書き）

今回、ちょっと短め。クラウドの前にについて、また前に活動報告にて説明したいと思います。（意味があるんですよ）ではでは。

## 新しい仲間、新しい町、新たな決意

「は、拳を強く握り2人のやり取りの行く末を見守った。もちろん、ユナもだ。

そんな空氣の中、クラウドはプッと、吹き出した。

「あはははーーおもしろいね、あんた」

「・・・」

「そう、怖い顔しないでさ。な。あんた達、旅してんだろう? 良かつたら、俺も連れてってくれないかな」

「はあ! ?」「え! ?」

ユナとルカウティウスの声がかぶる。あまりに突然のことだつたので、3人は驚いて目を見張つているのに対し、本人は「何みんなして驚いてんの?」というような顔をしている。

「そんなのできるわけが「分かりました」

ルカウティウスの声をさえぎり、ユナが1歩クラウドに近づく。ルカウティウスにいたつては、もつ何がなんだか分からなくなつてていた。

「ちょうど、お仲間が欲しかつたところです。わたくしたちの旅に同行してくださるなら、大歓迎です」

「おし。じゃあ、決まりだな」

「よろしくお願ひします・・・？」

「ああ。よろしくな、少年」

流されるままに、とりあえず一は挨拶を交わした。田の端でルカウティウスを見てみると、あまりの不機嫌そうな顔に（見なかつたことじょつ）と、一は自分に言い聞かせた。

こうして、3人のほかに胡散臭い謎の美男、クラウドが旅に同行することになった。

辺りがすっかり暗くなつた頃、一向は田舎での町フルールに着いた。

フルールは、レトロチックな町並みのどこか懐かしさを感じる町だつた。道を歩いていればわいわいと、酒場からにぎやかな声が聞こえてくる。町には街灯があり、ろうそくの火がぼんやりと辺りを照らしていた。

「とつあえず、今日は宿で休むか

ルカウティウスは、近くにあった宿に視線を向けた。

「そうですね。」の時間帯にどいかの民家に入るのも失礼ですし。」

「とりあえず、早く入らうぜ」

「貴様、いらっしゃるのをすれば即、殺すからな」

「はいはい・・・」

一は、あはは・・・と、笑つてその場を過し、一向は宿に入つた。

ユナとクラウドが眠つたあと、一は外にいたルカウティウスの元を訪ねていた。

「なんだ」

「あの・・・」

先ほどの不機嫌さは見られなかつたので、一は内心ほつとしつつ、

「僕に、剣を・・・教えてくれませんか」

と言つた。

ルカウティウスは、目をまんまるにして一を凝視していた。（やつぱり図々しいかな）と、どきどきしていだ一に返ってきた言葉は、意外なものだつた。

「何故だ」

「え？」

「何故、剣を学びたいと言つた」

「それは・・・」

一は、ほんの少しうつむいて脣間のことと思つ出した。

少女は戦つてゐるのに、自分は怖くて立つことさえままならなかつた無力な自分を。

「・・・強く、なりたいから」

「何故、なりたい？」

「ユナさんは、戦つていました。ルカウティウスさんも。なのに・・・  
・僕はできなくて。だから！――」

拳を強く握り、顔を上げまっすぐにルカウティウスを見た。

「自分を変えたいんです！！」

ひとりわ大きな声が、辺りにこだまする。

「・・・ふ」

ルカウティウスの口元に笑みが零れた。

「ならばその決意、証明してみせろ」

新しい仲間、新しい町、新たな決意（後書き）

いよいよ、かな。

## 特訓

「よろしくお願ひしますーー！」

勢いよく頭を下げて、特訓は始まった。

「まずは基礎からだ。一、「太陽の世界」での剣術の心得は知っているか？」

「いいえ・・・？」

「「太陽の世界」では、剣は人を守るために使つものであつて、私利私欲の為に使つことは禁止されている」

「それって、どこの世界でもおんなじじゃないんですか？」

そんなことを言い出せば、包丁は料理の時にバッドは野球の時に使うものであり、殺人やケンカに使うものではない。

そう思つた一に、ルカウティウスは首を振る。

「つまり・・・戦争や試合での真剣、剣は使えないのだ

「えー？」

「戦争は、銃か大砲になり刃物は一切の禁止だ。」

「じゃあ、使う時がないんじゃないですか？」

「賊から、家族を大切なものを守る時。 . . .」

そのあとは何か言いたげな顔をしただけで、口を閉ざした。だが、一には分かっていた。今・・・自分の旅の目的である、「勇者」を倒し、「月の世界」との平和条約を結ぶためだ。

これは、守るものに値する。なぜならば、もし、このまま「勇者」が魔王を倒そうとする動きが続けば、「太陽の世界」は、問答無用で攻撃を仕掛けてくるかもしれない。これは・・・そんな状況から大切な人を守るためであった。

一の様子に、何が言いたかったのか悟ってくれたのに気づいたルカウティウスはほんの少し、ほんのちょっとだけ、口元を綻ばせた。

「まず、それを前提とし、お前はこいつを使え」

差し出したのは、木で作った何の変哲もない棒だった。

「は、それを受け取つてほんの少しうるめいた。

「思つたよりも、重いだろ?」

「お、重いです・・・」

「その重さで自由自在に扱うことができれば、真剣では、それより早く鋭く、扱うことができるようになるだろ?」

「なるほど・・・」

「早速素振りからだ」

「はーーー。」

「もーと、軽めかにじひーーー。」

「ほー、もつ鈍つてきてこるべーーー。」

「やけくそに振るなーーー頭で考えひーーー。」

「バカーー危ないだろうがーーーしっかり握つておけーーー。」

・・・・・

「おはようございますーーーあら? 一様、すげへお疲れの様子ですが、どうかされました?」

朝、一は起きると腕が筋肉痛であった。「いててつーーーなどと、言いながら身支度を整えて部屋を出ると、コナがそつまつしてきた。

「あーーーうん。ちょっとね」

まさか、素振りをし続けて筋肉痛になつただの。なんてことが言えるはずもなく、一は笑つて誤魔化した。ユナは、何か言いたげだったが一はそうして、誤魔化しその場をさりげなく去つてトイレに隠れた。

**特訓（後書き）**

ファンタジーの主人公が筋肉痛つて、なかなかレアですね（笑）

## 2つの顔を持つ町

「お、少年……え……と」

「一です」

「やうやう……！――朝から、暗い顔してさなあ

「クラウドさんは元気ですね。」

朝っぱらから、元気がよすぎるとこののも、なんだとせ思ひが一は  
口こぼれをなかつた。

「マイケルを出でから、今度はクリエイティブなアーティストのチャマ

「な。――まあ、『月と太陽の狭間』から来たんだり?」

「ナヘですけど……」

「ビリヤッヒーの?」

「ビリヤッヒー……」

夢を見て、コナの頼みを引き受けたことにして、そして……目を  
覚ませばこじだつたのだ。ビリヤッヒーときかれても、答へようがな  
かった。

「まあや、俺らって魔法使えないし」

そういえば、何故自分はこの「太陽の世界」にされたのだろうか。

「それに、なんで一だつたの？」

(そりいえば、何でだつた……?)

そり言われば、不思議な話だ。だが、そこでユナが「んな」とを  
言つていたことを思い出す。

「太陽はあなたを選びました

「太陽が……僕を選んだつて」

「はあ？ なんじやそりやあ。」

クラウドは眉根を寄せるが、相変わらずの美顔はそのままだ。

「太陽ていうかさ、誰かが意図的に選んだんじゃないの？ たとえば  
さ……魔王、とか」

指を鳴らし、クラウドはのん気に「そんな」とを言つたが、一には何  
かを隠している風にしか見えなかつた。

「……クラウドさん、何を知つてるんですか？」

内心怯えながらそつ訊ねてみるが、それがクラウドにはバレバレだ  
ったのか、クラウドは一の頭をわしわしと乱暴に撫でながら笑つて

「やうビビとなつて」

そう声をかけた。

（クラウドさんって、いい人なんだけど・・・）う・・・なにか隠しているような感じがするんだけどな・・・）

ともかく、何も起こらなかつたことに今は安堵した。

昼間のフルールの町は、夜とはまた一味違う賑わいを見せていた。

たくさんの人々が町を行き交い、噴水の近くでは子供たちが水遊びをしていたり、広場には少女が花を売つていたりと、温かな家庭を思わせる町に変身していた。

「夜の雰囲気もいいんですけど、僕はこっちも好きです」

「夜は大人な雰囲気で、昼間は明るい町・・・2つの顔を持つ町なんて、おもしろいですね」

そんな意見を述べる2人に対し、

「デートにはぴったりだな・・・」

などと言つ美男がいた。

一は、聞かなかつたことにして辺りの風景に心を躍らせた。

3人が向かつたのは、役所であった。

ユナの話によると、普通町ではこういった役所に「勇者」についての情報が届くのだそうだ。そこで、役所へ赴き「勇者」の居場所を探すのだそうだ。

「ユナです。すみませんが、『勇者』の情報を下さるませんか?」

「おお、ユナ様。少々お待ち下さい」

役員の男性は、すぐに書類を探しに奥のほうへいって、すぐに戻ってきた。

「これが、この役所にある全ての『勇者』の情報でござります」

「ありがとうございます」

ユナは、微笑んで書類を受け取ると近くのソファーに座り書類に目を通した。

書類の数は、三枚ほど。

「少ないわね・・・まあ、仕方ないかしら」

ユナは、書類を丁寧に折りたたみポーチにしまい、立ち上がってルカウティウスの顔を見た。

「まずは、ナラヤの森に行きましょうか。」

ユナの顔には凜々しさが、どこか欠けているように見えた。

## 2つの顔を持つ町（後書き）

そういえば、何故ダンジョンに行っているかの説明がまだでしたね。  
次回、します。

## 一 の不登校の理由

「ナラヤの森？そこに向こう？」

「そうですね。まだ、説明していませんでしたね。」

ユナは、再びソファーに座り顔を一に向けて説明を始めた。

「『月の世界』と、わたくしたちの世界をつなぐ『歪みの道』は、そういった森や洞窟など人があまり訪れない場所に現れる傾向があります。」

「傾向ってことは……あるときとないときがあるってことですか？」

「そうです。そして、あつたときの場合……それは完全に『月の世界』から魔族がやつてきた時です。そして……対立するんです」

『勇者』の目的は、魔族の手から『太陽の世界』を守ること。それには、『月の世界』の支配者である魔王を倒さなければならない。・そのために、『歪みの道』を通り『月の世界』へ行く必要があるのだ。

「ですが、大半の場合『月の世界』についても道が分からず、魔族に手を出し、そのまま返り討ちにされてしまうのですが……」

そのまま、場はしんみりと静まり返ってしまった。

洞窟にいた時のことを思い出すと、マルクのことばが脳裏によみが

えりーの心を痛ませる。

「まあ、それを止めたくてやつてんでしょう。」冗談でしゃべりもしかたないだろ?「

「・・・やうですね。いきましょうか」

ユナは、まだその顔に陰りを持つ立ち上がりた。

ナラヤの森は、どことなく日本の森とよく似ていた。うつむくと茂つているのではなく、マイナスイオンが感じられる木漏れ日が優しい森。

一向は道なき道を進んで口の割れ田から流れる小川のほとりで休憩をしていた。

そんな中一は、筋肉痛のために体力をより多く消費していた。ずっと、外に出れずただでさえ運動不足なのに、筋肉痛もかぶされば少し歩いただけでもへとへとであった。

「一様は・・・〔月と太陽の狭間〕では、どんな暮らしをしていたのですか?」

そんな一に気を使ったのか、ユナがそんな他愛無い話を持ちかけた。

「……ずっと、家の中にいました」

はつきり言って、話すのは辛かった。だが、いつかは話さなければならぬだらうなとは、思っていたので、この機に話し始めた。

「僕の住んでいた世界は、学問を語ることを義務としていたなんですが……その場所に、怖くていけなくて……」

「怖い……？」

「僕は……いじめられていたんです。」

毎日、学校に行くと下駄箱には靴はない。落書きをされ、ゴミ箱に捨てられている。教室に入れば、黒板消しを投げられる。校舎裏で殴られ、蹴られ……

「いやだ！僕は……僕は……！」

「つるせえんだよ。この……

「人殺し？一樣は、人を殺したのですか……？」

突然告げた一の過去に、いつもは明るいクラウドも顔を曇らせて話を聞いていた。

「あれは……事故だつたんですね……それでも……僕は……」

人を殺してしまったのかかもしれません

## I の不登校の理由（後書き）

詳しい理由については、次の話にて。

## 慰め

その事故が起こったのは・・・僕が八歳の頃です・・・

その日は雨が降つていて、外で遊ぶことができず男の子達は室内で遊んでいました。遊ぶとはいっても、チャンバラや鬼ごっこといつたもので、最初は誰もがふざけていました。

「おい！見てみろよ！！」

調子に乗つた男の子が1人、窓のふちにたつて、偉そうに「王立ち」をしていました。その教室という部屋は、4階にあり、誰もそんな危ないことをしようとはしていなかつたので、男の子達は歓声を上げ、拍手を送りました。

「おい！一もやれよ！！」

更に調子に乗つた男の子達の1人が、弱氣だつた僕の背中をぐいぐいと押して、同じことをするように強制しました。

「む、無理だよ・・・」

「いいからやれよー！・・・」

「男だろー！？」

男子が、群がつてそういう詰めてきました。

その時数人の男の子が勢い良く僕を押して・・・

「あつ・・・！」

それで、こけるだけなら良かつたのに、あいにく僕はずいぶんと窓辺に立つ男の子の近くにいて・・・

「どんづ

窓辺に立つていた男の子は、まっさかさまに落ちていきました。そしてすぐに、教室にいる女の子たちの悲鳴が上がりしました・・・。

「そんなことが・・・」

「あはは・・・まあ、大人の人は事故であり、僕に強制した皆が悪いということで、僕だけが罪に問わされることはありませんでしたけど・・・やっぱり、大きくなると僕が悪いという話になるんです」

同じクラスの誰かの保護者が、何故自分の子が人を殺した子と同じ部屋にいるのかと苦情をしてきたり、女の子達から近づいてはダメと、母親から念押しされて・・・。

一人ぼっちだつた。

誰もいない。

弟からは兄のせいだと恨まれ、母親は表向きは優しい母親を装つているが夜な夜な、一の悪口を言つては、泣いていた。

「・・・すみません。暗い話になっちゃいましたね」

「別に?この世界には、人殺しなんて一杯いるから気にしないけど?」

「クラウドさん・・・?」

クラウドは、木にもたれてその畠を伏せている。だが、たんたんと話し始めた。

「俺も、人を殺した。14の時だ。そんでセーの姫さんも、堅苦しい護衛兵さんも殺してるよ。人くらい」

やがて・・・畠を開けてまつすぐに一を見据えた。

「いいか、人を殺すっていうのはな。自分で、自分の意思でするもんだ。少年の場合『殺してしまった』だ。それとこれとは、思いの重さが違う。そこにある罪悪感もな。」

一の中の何かが溶けていく。

「お前はちちゃんと『殺してしまった』ことに罪悪感を感じてるんだね?」

「はい」

「んじゃあ、いじゅうねえか。善人な証だ」

そう言つてしまた、眠るように畠を伏せた。

これには、コナモルカウティウスも感心した。クラウドは、一を慰めたのだ。

それにはちちゃんと一も気づいていた。

「あつがどりゅれこます・・・クラウドさん」

## 慰め（後書き）

以上が一の過去でした。  
まだまだ物語は続くのですが、念のためここまで書いておきました。

## 衝突

「ぐぐぐ……！」

再び歩きはじめた一行に、なんと「勇者」が現れたのだった。

「どうして姫様が『勇者』の邪魔をするんですか！？」

剣を握んで叫ぶようにユナに語りかけた「勇者」は、息も絶え絶えだった。一人対三人……しかも、相手はユナにルカウティウス、クラウドと来たのだ。これでは、「勇者」は歯が立たなかつた。

「邪魔？それはあなた方のほうではありませんか？！」

「なんだと！？」

凛々しく、威厳に満ちた今のユナは、誰がどう見ても一国の国を統治するのにふさわしい雰囲気を辺りに漂わせていた。

「わたくしたちの世界『太陽の世界』は『月の世界』と平和条約を結ぶのを、あなた方がさまたげていらっしゃるではありませんか！？」

「！」

「嘘だ！……姫様は魔王に惑わされているのです！……田をお覚まし下さい……！」

「田を覚ますのはあなたです！……人間」ときが魔王に勝てるなどもおもつていらっしゃるのですか！？」

「そんなの、やつてみなくちゃわからないでしょー?」

その言葉に、ふ・・・と、コナから威厳と凜々しさが消える。

そして、ひどく悲しい瞳をして田を細める。

「・・・分かりました。なら、やつて」「らんなわ」「・・・わたくしを殺して、それを証明して見せなが」「ーー!」

辺りに臭う血の香り。鼻が曲がりそうな強いにおいは、いつまでたつてもなかなか消えることはなく、地面に横たわる「勇者」の死体もいつまでたつても発見される」とはなかつた・・・。

一行は、「勇者」を倒したあと、フルールに戻つてきていた。

時は、すでに夜ですぐさま宿をとり寝静まつたのだが、ルカウティウスと一緒に剣術の修行にくれていた。

「ふん・・・! ふん・・・! 」

汗で全身を濡らし、筋肉痛に耐えながら一は棒を振つていた。

ビュン！…と、風を切る音が規則正しいリズムを刻んでいた。それには、ルカウティウスもふむ。という顔をしていた。

「お前、いい線をしているな。やはり、俺の思ったとおり才能があるみたいだな」

「本当ですか！？」

「手を止めるな！！」

「あ、はい！…！」

ルカウティウスに褒められ、思わず手を止めてしまったのは抜かりなく、注意され、振りながら話を聞いた。

「昨日一度やつただけで、今日はこの調子だ。お前は、なかなかいい線をいつているが・・・。」

「やはり、まだまだ練習不足が目立つな。 -ほら、もう疲れてきたな」

先ほどまではしっかりと風を切る音がしていたのに、それは鈍り、リズムも乱れてきていた。

「す、すみません」

「いや、いい。今日せこひまでこじよつ」

「はい。ありがとうございました」

手の甲で額の汗をぬぐい、小さく頭を下げる。

「うしてみると、ルカウティウスは見かけによらず優しい人だなあ。と、つづくと思つた。無造作な赤の長髪。

まるで、ビージャや魔王のよつなの。」

「なにをしてる。中に入つて風呂に入つて来い、風邪を引くぞ」

「あ、はいーー！」

棒を近くの茂みに隠し、一はふらふらな足取りで中に入った・・・

「よ。」

扉を開けると、真っ暗な塔の奥から少女が現れた。

一切の濁りのない透明度の高い水の色。その髪は月の光を反射して  
きらきらと輝いて見えた。

「お帰りなさいーー！」

少女は、クラウドに抱きついた。

クラウドに比べ、一まわりも小ちな身体はクラウドの腕にすっぽりと収まった。

「ただいま。ほら、時間がないんだから散歩に行くな早く行くぞ」

「うふ。ねえ、今日は何の話を持つててくれたの？」

少女の手をとり、外に出る。

「今日は、今頃一生懸命棒を振っている少年・・・ティアが呼んだ少年の話」

「ああ・・・あの少年ね・・・いままでできてる?」

「順調。あの調子ならきっと・・・」賢者<sup>（）</sup>にたどり着くだらうな

「クラウド、気をつけな・・・」

「へーじゃ、へーじゃー。」

クラウドは笑つてみせたあと、「外の世界」の話をはじめた・・・

## 衝突（後書き）

謎の会話が最後のほうで出ましたが。。。すこしづつ、謎を解いていくと思います。けつこう、物語の進むスペースが遅いもので。

## 女勇者

朝になると、一たちは勇者の探索をして次の場所のある古城にやつてきていた。

誰もいなくなり、廃墟と化した城は手がまつたくつけられないのでは草は生い茂り、ところどころに損傷が見られた。

「ヨリが、ペリアシタン城です」

やつてきたのはペリアシタン城といって、10年前に滅んだお城なのだそうだ。コナの話によると、太陽の世界にはいくつもの国があったのだが、『月の世界』の魔王を倒さんとしたために滅んだそうだ。そして、残つたのは『月の世界』との平和を望んだコナの国らしい。

「せういえば、コナさんの国の名前って何ですか？」

「『太陽の世界』にはわたくしの国しかありませんから、特別名前は要らなかつたのですよ。だから、国と、そのまま言つたり、『太陽の世界』と・・・ほんとうに、適当です」

うふふ。ヒコナは笑つた。

なるほど。世界に国が一つしかなかつたら名前なんて必要ないな。一は納得した。国だけでも、問題の国は一つしかないし、なんら支障はない。

「せういえば、よやくとしてみると『勇者』がくるわ〜。」

「う、ここにはなんと2人の『勇者』がいるのだ。2人とも、そこ  
その力を持つていいらしく油断は禁物だ。気を引き締め、一向は  
玉座の間を目指した。

「！」が玉座の間だな。」

窓からの光だけでは、ほの暗い玉座の間は広いせいか、なんだかタ  
ダでさえ寂しさのある古城なのに、更に寂しさを感じさせた。

「誰も、いませんね・・・？」

辺りを見回すが誰もいない。その刹那

「上だ！…」

クラウドの声で、上を見上げると、頭上にあつたシャンデリアから  
人が2人、襲い掛かってきた。

ルカウティウスとクラウドがそれぞれに敵の攻撃を受け止める。

「『勇者』か・・・」

「勇者」は間合いを取り戦いの姿勢をとる。剣を手に持ったユナと同様に一も剣を取つた。

「あ・・・」

重い。重いのだが、木刀に比べればまだまだ軽いほうだ。今になつて、ルカウティウスの言つていた本当の意味が真に理解できた気がした。

剣の柄を強く握り締め、息を整える。

高ぶる心臓の音に耳を澄まして・・・走り出す。

一と剣を交えたのは、金色の髪をした少年のほうだった。

初めて交える剣と剣の力。とはいっても、結果は火を見るより明らか・・・と思いきや、一の力もなかなかのものだった。先日まで戦うどころか立つこともままならなかつたのに、こうして力比べになつても遅れをとらない。「勇者」が一から離れようと距離をとらうとした時、一の剣が「勇者」の前髪をかすめる。

「あや・・・・・・」

「えつー?」

なんと、一と戦っていた「勇者」は女の子だったのだ。

「ルト!!大丈夫か!?」

「ええ・・・でも

女の子は、苦虫をつぶしたような顔になり、一を睨みつけた。

女勇者（後書き）

大変長引く（？）お待たせしました！！  
やっと、更新できました。

女勇者と勇者の最期

「女勇者」はよく見てみれば、少女の顔をしていたが、キツ！と鋭い目で一を睨みつけているので、一は睨まれている理由がいまいち分からず、おどおどしていた。確かに、敵ではあるが女だとバレるまでは、普通だった気がする。まあ、顔は真剣だつたが。

「貴様も私を女だと馬鹿にするのだらう——。」

「し、しないよ！驚いただけで・・・つ

「……」

〔女勇者〕に気迫負けをして、一は何故か謝つてしまつていた。

「いや、少年、心折れるの速いから！」「

即座にクラウドがツツコむが、一の周りにはダークなオーラが漂つ  
ていたままだ。

「女勇者」か・・・珍しいな」

ルカウティウスは、もう1人の「勇者」と刃を交えながら呟いた。  
もしくは、相手に話しかけたのかもしれない。

「しかし、お前達には関係ないだろつー?」

「勇者」は剣を振りかざし、剣を切り結んでいく。なのに、ルカウティウスは、それを受け止めるばかりだった。「勇者」は、それに激怒しながら剣を振り回す。

「くそ……なんで、攻撃してこねえんだよ……ルカウティウス、余裕がまして……！」

「勇者」は、ルカウティウスが手加減をしていることを悟ったのであろう。それに怒りを覚え、力が更に強くなる。

「ぐつ・・・・

「ははは……余裕がまして負けるなんて、バカ・・・・

ぐさつ・・・・

その音に、戦いは一時停止した。「勇者」が背後にいたクラウドに剣で貫かれたのだ。やられたのは、首だつたので声も出すことなく、静かに息絶えたのであった。剣を引き抜くと、血が勢いよく吹き出して、返り血に真っ赤に染まるクラウドとその剣。その様子を「勇者」は啞然とした様子で凝視していた。

「・・・ライト」

小さく、呟いてから

「ライト……！」

大声で叫んで、「勇者」の方へ走り出した。

「ライト……しつかりしろ……ライトオ……」

いまだに、大量の血を流し続ける〈勇者〉を〈女勇者〉が抱きしめる。

クラウドやルカウティウスはそれを静かに見守っていた。

「……ライト」

最後に、力をなくしたようにだらりと腕を下ろし……剣の先を自分の中に突きつける。

「えつ……？」

一は、身体を乗り出していた。〈女勇者〉は死ぬつもりなのだ。〈勇者〉を追つて。

「大丈夫……あなたを1人にしないわ」

そして……

「これで、おわりね」

ユナは、勇者の情報が書いてあつた書類を破り捨て、一たちに向き直ると一だけが浮かない顔をしていた。

「どうした、まだショック受けてるのか？」

「違います！・・・ただ。これで、いいのかなって」

「いいのかなって？」

一は、うなづいて言葉を続けた。

「いやつやつて・・・ただ、勇者を倒していつても、何も変わらない  
気がするんです。」

その一言に、3人が驚いた刹那

「だよな。『月と太陽の狭間』から来し者よ」

## 女勇者と勇者の最期（後書き）

本格的に、動を出しあがむ……。

## クラウドの裏切り

「誰ですかー!？」

周囲を見渡すと、いつの間にか玉座に一人の男が頬杖をついて座っていた。

「〈賢者〉か!..」

「〈賢者〉・・・?」

ルカウティウスの言った〈賢者〉には反応した。〈賢者〉なんて、聞いたことがないのである。〈勇者〉とは、違うのだらうか。

「〈賢者〉といつのは・・・〈勇者〉の中でも、一番強いといわれる者の」とです

「まあ、なんたって魔族と人間のハーフなものだからね。人間でありますながら、魔法も操れるとなれば・・・僕に適うものなんてないからね」

魔族と人間のハーフ・・・主人公によくある、特別な存在だ。それが、〈賢者〉

ルカウティウスは凄まじい剣幕で〈賢者〉を睨みつけ、ユナは恐怖に顔を引きつっているように見えた。

「おや。やこりのなはクラウド君か」

ぴくりと、クラウドの肩がゆれる。その顔には、どこかにつむの元氣は消えて、悔しい表情に近いような顔になっている。

「彼女は元氣かな？」

「彼女……？」

一は、クラウドのほうを見た。

「はは……。」めんね、少年。わりいが……」

クラウドは、双剣を一のほうに突きつける。

「死んでもらわないと」

その刹那、一の意識は途絶えた……

「一様！……そんな、クラウドさんどうして……！」

「……俺にも、守りたいものがあるんだよ」

そして、クラウド対ルカウティウス・コナの戦いが始まった……だが、その勝敗は火を見るより明らかだつた。

「……クラウド」

少女は、帰ってきた青年に悲しげな瞳で迎えた。

また・・・」の人は、自分のために傷を負つてきた。心の傷を。

「こいつがそうだろ?」

クラウドは抱き上げている少年を指して、にいと笑った。

「あ・・・」

この子がそうだ。

忘れるわけがない。自分と同じ、「外の世界」に憧れているのに、  
出たいのに、出れない子。

「どうしたの、この子・・・」

「ん。ちょっと、な」

いつもこいつやつて自分の都合が悪い時は逃げるのだ。少女は、むつ  
として青年を睨みつける。

「そんな怒るなよ・・・ほら、こいつはまだまだ目が覚めないだろ  
うし、散歩に行くぞ」

「・・・クラウドは・・・するこ」

「何が?」

「こつも・・・わうやつて・・・」

クラウドは、少年をベッドの上に寝かせてから少女に近づいて頭を優しく撫でる。

「だ・・・だまされないもん

そう意地になつてみると、青年は優しく微笑んで口付けを落とす。こうなると、怒りがすう・・・と溶けていってしまう。ああ・・・だめなのに。そう思つても、頭はぼんやりとしたまま考えさせてくれない。

「ほり、行かないのか？」

結局、自分は遊ばれているのだろうか。

少女はそんな不安を隠しながら青年の・・・クラウドの手を取った。

## クラウドの裏切り（後書き）

「」はじめて初めての恋愛シーン。一君は私たちのナ-

## 呪いを受けし美女

冷たい石に囲まれたよつた感覚で一は田を覚ました。

辺りはるうやくの光でぼんやりと辺りを照らしているが、ここなどこのだらうか。

一は、後ろに振り向いてみると「あ」と齒いた。どひゅひ、ベッドで寝ていたのだが落ちてしまつたらしい。それはそうと、といえず自分が生きていることに疑問を持った。自分は確かクラウドだ・・・

・

「クラウド・・・?」

名前を呼んでみるが、少し響くだけで返事はない。そばこはユナもルカウティウスもない。ともかく、誰かいないか一はこの建物を探索してみることにした。

とつあえず、扉を開けてみると一は階段へと続く短い廊下があったので、階段を下りてみた。

一番下まで降りると、すぐ目の前に扉があつた。外に出る扉だらうか。一はざきざきしながら扉を開けた。

「うわあ・・・」

そこにあつたのは、青い太陽の下で咲く名も知らない花の花畠だつた。見たこともない、綺麗な花を手にとつてみると花独特の柔らかさが指先で感じ取れた。

「なんていう花なんだろう……」

「月下美人」

「…？」

その声に驚いて振り返ると、そこには月を背にしたクラウドが立つていた。

「クラウドさん！－コナさんやルカウティウスさんは－？」

「大丈夫、生きてるよ」

「よかつた・・・」

「ほら、ちゃんと挨拶しとけよ」

どうやら、2人は無事のようだ。クラウドが嘘をつとは思えなかつたし、とりあえず信じてみる。

挨拶？一が首をかしげると、クラウドの背後で一切の穢れを取つたどこまでも澄んだ水が煌めいたような水色の髪が揺らめいた。そして、そろそろと顔を出す。

「は、はじめまして・・・？」

小声で、そう言つた声からして女の子だらう。しかも、かなりの美人さんのようだ。

「ほら、そんなんじゃ失礼だらう?」

「ううー···」

そして、姿を現した。

絶世の美女、といったところだらうか。それどころか、その言葉でも足りないくらいの美貌をもつた少女であつた。肌は、恐ろしいほど白くまるで太陽の光を浴びたことがないんじやないかと思つくりいで、瞳は優しげな淡い緑色。水の髪と緑の瞳で、自然を思わせた。

「は、一です」

「は、一くん? わ、わたしはティアです」

あまりの美しさに一の手は小刻みに震えている。それに気づいたのか、クラウドが一を見てニヤニヤとしていたので一は顔を赤くしながら話を変えた。

「そういえばこの花、月下美人でしたっけ? 級麗ですね」

「この花、夜にしか咲かないんですよ

「珍しいですね···」

そう言つと、ティアは目をまんまるにして一を見た。なにか、ヘン

な事を言つただろつかと、ほんの少し焦つた。

「えつと、なにかへんな」といいましたか?」

「いえ・・・。あの、敬語じゃなくていいですよ?」

「あ、はい・・・じゃない。うん」

こつちに来てから敬語しか使っていなかつたので、なんだか普通に話すことに違和感を感じながら一はうなづいた。

「あつははは!..! テイアどれだけ緊張してゐるのを!..!」

「だ、だつて!..!..! クラウド以外の人と話すのはじめてだもん!..!」

「はじめて!..?」

「ああ、ここいつも!..!」

クラウドがティアを抱き寄せ、一言

「呪いで太陽の光を浴びると死ぬんだ」

呪いを受けし美女（後書き）

やつとこじままで来ました！－いえ－！－  
ティア、美女です。飛び級です。  
見ているだけで、震えるくらいです。

「え・・・？」

太陽の光を浴びると死ぬ・・・?呪いで?

一は愕然としていた。太陽の光を浴びれないということは、昼間は外に出れないということ。

つまり・・・この少女は外に出たいのに、出れないという理由は違えど一と同じような境遇にいたのだ。

「まあ、詳しいことは中で話そつ。少しでも太陽が昇ればアウトだからな」

「ティアはな、そのーなんだ。話せば長くなるんだが。」

「ま、待ってください!!」

一が目覚めた場所、塔の中にて3人は話を始めていた。

イスに座ると、テーブルの上にあるひとつそくの火がちらついた。

「ティア・・・は、一体なんでのろいを・・・」

「待て待て。今からそれを話そつとこなだよ

クラウドは首を振つて一をなだめた。

「ま、一にはトライアニアであつた頃の話からしなきやならぬいかな

・

いつして、クラウドとトライアの昔話が始まつた。

## ■話（後書き）

■話は、次の話から始まります。すみません。

## クラウドの記憶ー

空には青い太陽と星

辺りは名も知らぬ花が咲き誇り、いくつかの花は血に濡れている。クラウドは呪いの魔女が住むといわれる塔にもたれ、空を見上げながら、ぼんやりとしてた。

痛みは限界を超える、もう痛いとも感じない。ただ、血が流れている。

ひどく眠たかった。でも、目は閉じなくなかった。

別に、死ぬのが怖いわけではない。

ただ、目を閉じたらあの時の光景が目に浮かびそうだ。

それが怖くて、目を閉じて死ぬことに殉ずることができなかつた。

死ぬ。

自分は死ぬ。

あいつらと回りよう。

クラウドは、ただ死ぬのを待っていた。

もう、生きるのは疲れていた。

あまりにも、辛すぎて・・・

その時、影がかかった。

目の前に、ひどく美しい少女が立っていた。

髪は穢れを知らぬほどまで透き通りほんの少し煌めいて見える水の色。

腕は枯れ木のように細く、肌は太陽の光を受けたことがないのかと疑うほど白さ。

クラウドは一瞬、天使が迎えに来たのかと、錯覚してしまった。

自分は、神なんぞ信じたことなんてないし、ましてや天使なんぞ信じるわけがなかつたあの、自分が。

「・・・死ぬの？」

優しく、甘みを含んだ声はまさに天使のようだつた。

だが・・・天使にしてはやけに寂しそうな瞳をしていた。

「・・・死ぬんだろうな・・・」

自分は、何を見ているのだろう。

いよいよ出血多量で意識が朦朧としていた。頭が混乱している。

「・・・死なないで」

「しなー」

死なないで。なんて、初めて言われた。

いつも、戦場で命を散らすことが美德とされていたのに。

「・・・あんたはー」

誰だ？そう、聞く前に意識が途絶えた。

## クリヤのアート（後編）

始まりです。この曲は、いつの間にか、リードセントナー。

クラウド記憶2

むせぬやうな血のにおい

辺りに溢れかえる大量の死体

その中に立つてゐる自分

「う・・・あ・・・」

この手が赤く染まって、仲間を失って、たくさんの人を殺して。

全て夢だつたらいいの」と思つた。今すぐ田が覚めて、「お前、うなされてたぞ?」って、声をかけてくれる奴らがいる、げんじつ!。

叫んでも、叫んでも、何もなかつた。ただ、むなしさが募るばかり

「大丈夫ですか・・・？」

はつと、田を覚まし飛び起きたと、全身が汗でぐっしょり濡れていて、気持ちが悪かった。

傍らには、意識を失う寸前に会った少女が心配そうにクラウドを見つめていた。

「あんたは・・・それに、俺、生きてる・・・？」

傷があつたわき腹に触れてみるとそこには傷跡一つなく、ただ、斬られたときによいした服の穴があるだけだった。

「お前が治してくれたのか？」

「あの・・・迷惑、だつたですか？」

「迷惑・・・？」

「だつて。そ、の。」

まあ、病院へ行かず、軍に戻らず、呪いの魔女が住むといわれる塔にもたれていったのだ。自分は自殺願望者にでも見えたのであらう。

「いや、ありがとう。とこひで、あんた名前は？」

「ティア。」

「そつか。ティアか・・・俺の名前はクラウド、よろしくな

そう言つて、手をのばすとティアは不思議そうな顔をした。なぜ、手を伸ばしたのかわからなのだろうか。クラウドは

「握手」

といつて、少女の瞳を見上げるよつこした。

それでも少女は頭をかしげている。

「握手……とは、どうしたら?..?..」

このティアと言つ少女は握手を知らないというのだ。クラウドは、本氣で言つているのかと疑問に思つたが、こんな美しい少女が嘘をつくとは思えず、じうだよと、ティアの手を取つて、握り締めた。

驚くほど、細い指に冷たい手。

自分の太く、長年、剣の鍛錬ばかりしてきた自分とは全然違つ指だつた。

ゆつくりと手を離して、これが握手といつものだと指を鳴らした。

「これが、握手……じゃあ、今の音を出す、動きはなんといつんですか?..」

「指を鳴らす?..つて、いつのか?..」

もう一度、鳴らして見せると、ティアは珍しいものをはじめて見たときのよひに目を輝かせた。

「わあ……見せて見せて!..!..

もう一度やつて見せてとこつことなのだろうか。でもせつかくだ。こんなことによかつたら、教えてあげようと思つた。

「ティアもやってみるか？」

「わたしは、音をなる声は持っていないません……」

「練習すればできるよ！」

「練習……？」

「とりあえず、やってみよっか」

クリヤアの記憶2（後編）

クラウドの記憶はまだつづり切れ無い。。。。

## クラウドの魔女

「できました……」

少女・・・ティアは、顔を明るくさせてもう一度やつて見せる。パンチンーと、なんとも気持ちがいい音がティアの細い指から奏でられる。何度も何度も練習したため、摩擦で指がヒリヒリしていく、赤くなっているが、それも彼女の努力の証だろう。クラウドは、微笑んで彼女を見やるとティアはクラウドに抱きついてきていた。

「わあっヒー！」

「あいつがどうークラウドー！素敵ー！」

単調な言葉のつなぎだったが、それでも少しばかり役に立てたと思うと、クラウドは嬉しくなった。人の役に立つというのはやはり、気持ちのいいものだ。クラウドはティアを見てそう思った。

「ヒーリー、ヒーリーなんだ？」

「ヒーリー、塔の中」

「・・・は？」

たしか、クラウドがいたのは呪いの魔女が住むといわれる塔で、これは塔の中、田が覚めたら少女がいた・・・

「ぬああああああああああ

塔全体にクラウドの叫び声がこだまする。ただ、ティアがきょとんとあたふたするクラウドを見つめていた。

「つてことは、お前が噂の魔女……？」

「魔女……？ 魔女って何ですか？」

いや、こんな可愛い子が魔女なわけがない。クラウドは、一人首を左右にブンブンと振つて、悪い。と、頭を掻いた。

「突然、ごめん。人違いだ……」

「魔女……て、クラウドの知り合い……ですか？」

「いや、知り合い……だつたら、怖いな」

クラウドが一人でぼそぼそと呟くものだから、ティアは何のことか分からぬままとりあえずうなづいている。クラウドは、意を決してティアに尋ねた。

「ティアは……何者なんだ？」

どくんっ、心臓が大きく跳ね上がる。ティアとクラウドの視線がぶつかり……

「ティアは、ティアです。人間です」

そりじやなくて……あまりにも天然な言葉が帰ってきたものだから、クラウドはいやいやと手を振る。

「ティアは、なんでこんな暗い場所で一人で住んでいるのかって聞いてるんだけど……」

「それは……」

それからは、沈黙がつづいた。クラウドはティアに気遣っているのか、それ以上の念押しさないし、だからといってティアは、黙り込んだまま何も言わない。一体、いつまでつづくのかと思われた矢先、クラウドがティアに優しく言った。

「聞かないほうがいいのかな? んじゃあ、腹が減ったしなんか食べたいんだが……」

「あ、ちょ、ちょっと待ってください」

逃げるよつこにそつ言つて立ち去つたティアのいた場所を見つめて、クラウドは思った。彼女は……もしかしたら、『月の世界』の者かも知れない……と。

## クラウドの配置（後書き）

遅れすみません。かなりのスローペースです。

それから向日も塔の中で時を過した。

あれからティアについては何も聞いていない。だが、それでも構わなかつた。彼女が命の恩人であることにかわりはないのだから。

それに、じぶんがノコノコと町に行けば殺されるに決まつてこむ。

いつそ、このままティアと2人で・・・

そう思つていたある日の一とだった。

「ねえ、クラウド」

いつものようにティアが話しかけてくると、クラウドは向ふなしに首をかしげる。

「なんだ？」

「空つて・・・見たことある?」

「空・・・?」

空なんて、外に出ればいつも元にあるものであつて、誰もが知るもの一つではないか。

クラウドは、ティアが不思議な質問をするものだから、思わず吹きだしてしまった。

「空ひて、外に出れば見えるじゃないか

「青いの？」

「青い以外に何があるんだよ」

「・・・黒」

「は？」

なんだか、ティアの様子がおかしい。

クラウドは笑顔を消し、次のティアの言葉を待つた。

「一回だけ・・・外に出た」とあるの」

ぽつり・・・ぽつりとティアは話し始めた。

「その時は・・・付き添いの人気がいたけど、もうここなくなつたの。  
きっと、わたしのことが怖いから」

そして・・・クラウドを見据える。

ほんの少し、泣きそつた目

「ティア・・・？」

「クラウド、わたしを外に連れ出して。もちろん……夜によ?」

夜であることを確認してから、クラウドはティアを外に連れ出した。

今宵、満点の星空である。

「んー……やつぱり、外はいいね」

思ひきり伸びをして、ティアは微笑んだ。心の底から嬉しそうな顔は、見ている者も幸せにしてしまう。・・・そんな笑顔。

「それで、どうして夜なんだよ?」

笑顔がふと消え、ティアは悲しげに手を細め、クラウドに背を向けて・・・しき告げた。

「わたしは・・・太陽の光を浴びると死ぬ呪いを持つてるの」

雲が月を覆い隠す。

「呪い・・・?」

「うん。小さい頃に・・・  
賢者} から

賢者} ・・・

数多くいる「勇者」の中でも飛び級の強さだときいた事がある。

まさか、魔法を使えるとは……もしかしたら《月の世界》の者かも知れない。

クラウドはそんな考えを張り巡らしていくと、ティアがつづけた。

「……クラウド」

彼女の小さな手がクラウドの剣の修行で「ロジロジ」と呼ぶ手を包みこむ。

「それでも……」こんなわたしでも、構ってくれる？

2人の視線が交差した。

その時、クラウドの心臓が倍に跳ね上がった。

溢れてくる愛しい気持ち。

（ああ……ティアは、こんなにも小さい手だったのか……）

指パッチンを教えた時は分からなかつた、もしくは意識していなかつたことがクラウドの脳裏をよぎつた。

一奪うことしかできなかつた自分

一救うことなんて、できやしない

一それでも……

一奪つ」)とティアが空を・・・青い空を眺めるのなひ・・・

「倒すよ／＼賢者」

誰かのために・・・そつ痴ひのせ、初めてのことだった。

それでも、悪い気分ではない。

「いつか、青い空を見せてやるから、待ってくれるか?」

そして、ティアはクラウドに手を伸ばした・・・

クリアのアドバイス（後書き）

遅くなつてすみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2799y/>

英雄物語～月と太陽のレクイエム～

2012年1月13日22時16分発行